

海外スペシャリスト編

[登壇者] 秦 勲

(株)大林組 台北地下鉄信義線CR580B工区工事所長

本企画「スゴ腕技術者に学ぶ」も遂に最終回。最後を飾るのは、海外の建設プロジェクトに25年以上従事されている(株)大林組の秦勲さん。世界を舞台に活躍する秦さんに、海外スペシャリストとしての信念と秦さん流の海外現場術を伺った。

多趣味な スポーツマンだった 幼少期から大学時代

秦さんは大分県国東半島の漁師の家庭で生まれ育った。若い頃の秦さんを一言で表現すると「多趣味なスポーツマン」である。幼少期の日課は海で魚釣りをする。中学・高校時代は、短距離走では100mを11秒台で走り、柔道や器械体操もこなす一方で、油絵にも目覚めるなど、多趣味なスポーツマンであったようだ。大学進学時に土木工学を選んだ理由を伺うと、「数学は得意で、国語は苦手。当時、田舎の仕事と言えば医者か公務員か建設業で、一番身近なものづくりのできる土木工学を選んだ」と語られ、福岡へ飛び出すことを決めたようだ。第二次オイルショックの中で大多数の学生が公務員を目指し勉強に打ち込む中、遊びに没頭する「粋な学生生活」を送られたようだ。

海外スペシャリストへの道は 「沖縄勤務」が転機!

最初の配属先は、なんと出身大学の目

地道な見積もり時代が、 「プロジェクト俯瞰力」 を磨く!

の前の現場。その後、2年間の現場経験を経て、2週間の手伝いの約束で沖縄へ往復チケットを片手に出張された。しかし、これが人生の転機であった。到着後、復路のチケットは不要になったとだけ告げられ、急ぎよ2年半の沖縄暮らしとなった。現場では、タンク基礎建設やダム建設に従事した。タンク基礎現場は大規模な福岡の現場とは異なり、職員はたった1人。規模は小さくてもすべてを責任者として1人でこなしたことで現場の全体把握の力がついたようだ。次の配属先であるダム洪水吐き改修現場はアメリカ統治時代にアメリカ工兵隊により構築されたダムであり、海外の文化や技術に直接触れることができる現場であった。図面はすべて英語、単位もインチやフィートで記載されていたため、「海外に対する壁みたいなものは、自然となくなった」と当時の現場を思い出しながら語られた。

沖縄勤務後、建設業を取り巻く環境は第二次オイルショック後であり国内

の建設需要は冷え込んでいた。会社の方針で「海外プロジェクトを増強!」と決まり、各支店から若手技術者が召集され、秦さんは都内の英会話教室に通うことになった。半年間、終日、英語漬けの日々を過ごしたが、本場に英語力が身に着いたのは1991年から駐在した4年間のシンガポール生活であったようだ。「現地現場で学ぶことは、言葉や文化も含めてすべて違う」と、若いうちに海外生活を経験することの重要性を伝えられた。

そして、若い頃に国内で2年間経験した「地道な見積もり時代」がプロジェクト俯瞰力を鍛えたという。見積もりの仕事とは、プロジェクトの立ち上げから、建設、運用、維持管理までの全体のヒト・モノ・カネの流れを俯瞰的にとらえることが必要である。特に、当時はす



写真1 笑顔で語る秦さん!
人を引き付ける魅力の原点!



写真2 ジャカルタプロジェクトでの現場視察の風景(左から二番目後方が秦さん)

はた・いさお

1956年大分県生まれ。九州大学工学部土木工学科卒業後、1979年(株)大林組に入社。1984年よりタイ、インドネシア、シンガポール、ラオス、ドバイなどの海外プロジェクトに25年間従事。海外支店土木営業部営業部長などを歴任し、2009年より台北地下鉄信義線CR580B工区工事所長。現在55歳。

すべての計算を電卓とする時代。今のようにエクセルのセルを一つ変更すれば再計算してもらえなくなる。地道にすべてを手計算でやり直す作業の日々で大変苦労されたそう。しかしこの経験が、常にプロジェクトの全体構成を考える癖を身に付けることに幸いし、現場に戻った際にも全体を見通しながら指示ができるようになったという。

海外現場を
まとめる工夫
相手に敬意を払う!

海外勤務時における工夫を伺うと、「相手に敬意をもって接することに尽きる」と語る。文化も言葉も違う状況下において、自分の方法を押し付けることは決してやってはいけないと熱く語られた。まずは彼らの考えを聞き理解することが重要と話す。なぜなら、土木工事の技術は各国・各現場の特性に合わせて進歩しており、それらの技術と思考方法を日本のものと比較し融合させて、最も現地にあった方法を模索する必要があるからだという。また海外工事においては欧米式の契約がすべてであり、問題が起きたときの対応方針が詳細に書かれているが、その根底には宗教や文化の違う国においても大切な人間関係であることに変わりはないと断言される。

タイでアースダムの補修工事に従事した時は、昼は国軍が現場の周囲を警備するため安全だが、夜は焼夷弾が飛び交うという過酷な現場であったため、現場の技術者のヤル気を引き出すことが重要だったそう。以前、会社の先輩に「マネジャーとは問題を解決する人である」と教えられたそう。かつよく言えば「俺が責任をとってやる! だから、自由に動け! だから頑張れ!」と声をかけるようにしているという。これまで大きな失敗をしたことはないと言っているが、その真意は「若い優秀な部下に囲まれてから」と笑顔で語る。それもそのはず。部下に生き生きと働いてもらう雰囲気づくりには大変注力しているそう。 「尊敬をし、褒めることで気持ち良く働いてもらう」。これが秦さん流の現場術だったのだ。

世界と戦う
「1mmの技術力」と
「技術者倫理」

秦さんは、お客さんの求める水準を見極める目と、それを満たす1mmの技術力が必要と語る。たとえば、鉄板1mmを安定的に削る技術がなければ、技術提案書には安全の観点から数mm厚い設計値を書くことになる。それが巨大

な構造物であれば、厚さ×面積×鉄板単価が追加コストとなり、厳しい受注競争下では重荷になる。だからこそ、技術革新には新しいものを生み出すだけでなく誤差を小さくするという卓越した技術も不可欠になり、その技術力の差が受注競争を勝ち抜く一つのポイントになるそう。ただし! と釘を刺す秦さん。「技術者倫理」というと堅苦しいですが、技術的に安全を確保できないと危険になる。技術の限界を理解しておくことは大変重要です」と語る。学生の皆さんには、「普段取り組んでいる研究や技術開発が社会にどのような役立つのかを自問自答して欲しいです。その意味がわかった時、きっと新たな世界が見えてきます!」と熱いメッセージを送られた。

学生編集委員 三室碧人、篠崎真澄

今月のスゴい技術者からの一言

土木の「自信」と「誇り」を取り戻せ!

最近「土木」ってあまり言わなくなりましたよね。しかし、土木は人びとに一番身近な技術で、生活に直結した技術だと思います。そして、世の中には不可欠な仕事であることに変わりはありません。だからこそ、自信をもち、誇りを持って人生をかける仕事です。皆さんと一緒に働けることを楽しみにしています!